



## こんな指導をしてみたい

六年（下）「やまなし」の

挿絵を生かして

新しい学習指導を考える会

### 1 教材について

宮沢賢治は、色・音・光、さらに匂いや味についても鋭い感性をもっていた。彼のもつ豊かな想像力とあいまって、賢治独特の言葉や表現がふんだんに盛り込まれた作品。それが「やまなし」である。

よく、宮沢賢治の作品は難しい、何を言おうとしているのかわからないという声を耳にすることがある。この「やまなし」には、難しい語句は特にはないが、挿絵を手がかりにして、賢治の表現した一つ一つの言葉を味わい、そこからイメージを豊かにふくらませていけば、賢治の表したかったものが見えてくるのではないだろうか。

児童一人一人が表現を味わっていく過程を大切にし、この「やまなし」を読み味わわせたい。

この教材で身につけたい力は、作品の情景を、挿絵を手がかりにし、叙述に即してイメージしながら読むことができるようになること。色・光・音・匂いなどを表す言葉や、擬態語・擬音語などの使い方、語感について関心をもち、言語感覚を磨くことができるようになることである。

### 2 挿絵を生かしてこんな指導を

新しい教科書の挿絵は、大判、四色になったことで実に鮮明、かつ象徴的である。児童が読み進めていくうえで、イメージを広げる際の手助けにもなっている。

教科書を開くと、挿絵が全面上部にある。それは、川の底から見た天井の部分である。自分を、谷川の底に身を置く「かに」の視線に置き、「かに」を通して、「五月」「十二月」と読み進められている。

「かにをかいてもいいですか。」

児童から、こんな言葉が出てきた。

「かな丸石」と答える子もいるし、「やまなし」と答える子もいる。あるいは、「かにの影」と答える子もいる。それは児童が個々に思い描いたイメージであり、自由なものであっていいと思う。

挿絵の中に、「かわせみ」を登場させたり、「やまなし」を登場させたりすることも、児童は喜んでやることである。こうして挿絵を利用することは、大いに読解の手助けになる。

最後には、「やまなし」の各場面の絵をかき、それを背景にして音読発表会を行うのはどうであろう。より「やまなし」の作品の世界に浸れるのではないだろうか。

「やまなし」は、言葉に深くかわり、描写を読み、イメージする楽しさを十分に味わえる作品である。子どもたちに、一つの場面を、挿絵を手がかりに丁寧にイメージさせることにより、自然界の厳しさや豊かさ、そして生きものに對する宮沢賢治の優しさをもとらえることができるだろうと思う。

児童は、教科書の下方に「かに」をかき、そこから、叙述に沿った読みに入ると、作者の思いと重なり、確かな読みになっていく。

「五月」の場面の挿絵は、「日光の黄金」でありながら、「魚の鉄色」「コンパスのよつに黒くとがっている」「魚の白い腹がきらつと光って」などの表現からであつつか、直線的な絵となっている。そして、「白いかばの花びらが、天井をたくさんすべってきました。」「で、やや緑がかったイメージに変化する。

「十二月」の挿絵は、透明感にあふれている。「ラムネのびんの月光」である。天井の部分は、「黄金のぶちが光り」「月光のにじがもかもが集ま」ったのである。

「このよつに」「五月」と「十二月」の對比は、「かに」の視線から挿絵を見ることによつつかがうことができ、児童はよりリアルにイメージをふくらませることができ。

挿絵にある黒い丸いものは何か。「やわ